

## 午前

今日は最後の日だから  
ヨーグルトが出た

誰も僕を引き留めることはしない  
「いってきます」という

いびつで朴訥な1日が始まる

斜面いっぱいには  
彼らなりの愉悅があるようにも見える  
抱かれています、ということのひとつの姿——  
掌の中には、僕自身が包まれている

このような時間は長く続かない

哀しいぐらいに透き通った大気の上に  
宇宙なんか存在しないというような  
ひんやりした明るく青い空が懸かっている  
早々と僕の魂を高く、高く吸い上げてゆく

哀しさも、恐怖もずっと後ろに置いてきた

北からの冷たい空気と  
暖流からのぬるい空気が混じり合い  
蒸気が斜面を上ってくる  
草々に水滴を被せながら

ただ、何らかの証を残すために靴を脱ぐ

許されている、という思いに  
僕は、ただ大声で泣きじゃくることができた  
それを自死と呼ぶことができぬほどに  
完成されたものとして滅びたい

\*

眠りに入り、意識を見失うことと  
生を抜け出て、意識を失うことの明らかな違い

蒸気の中に倒れこむ瞬間に彼は感じた  
ただ見捨てられていた、と

(2011.11.13)